Ⅱ－2 水害

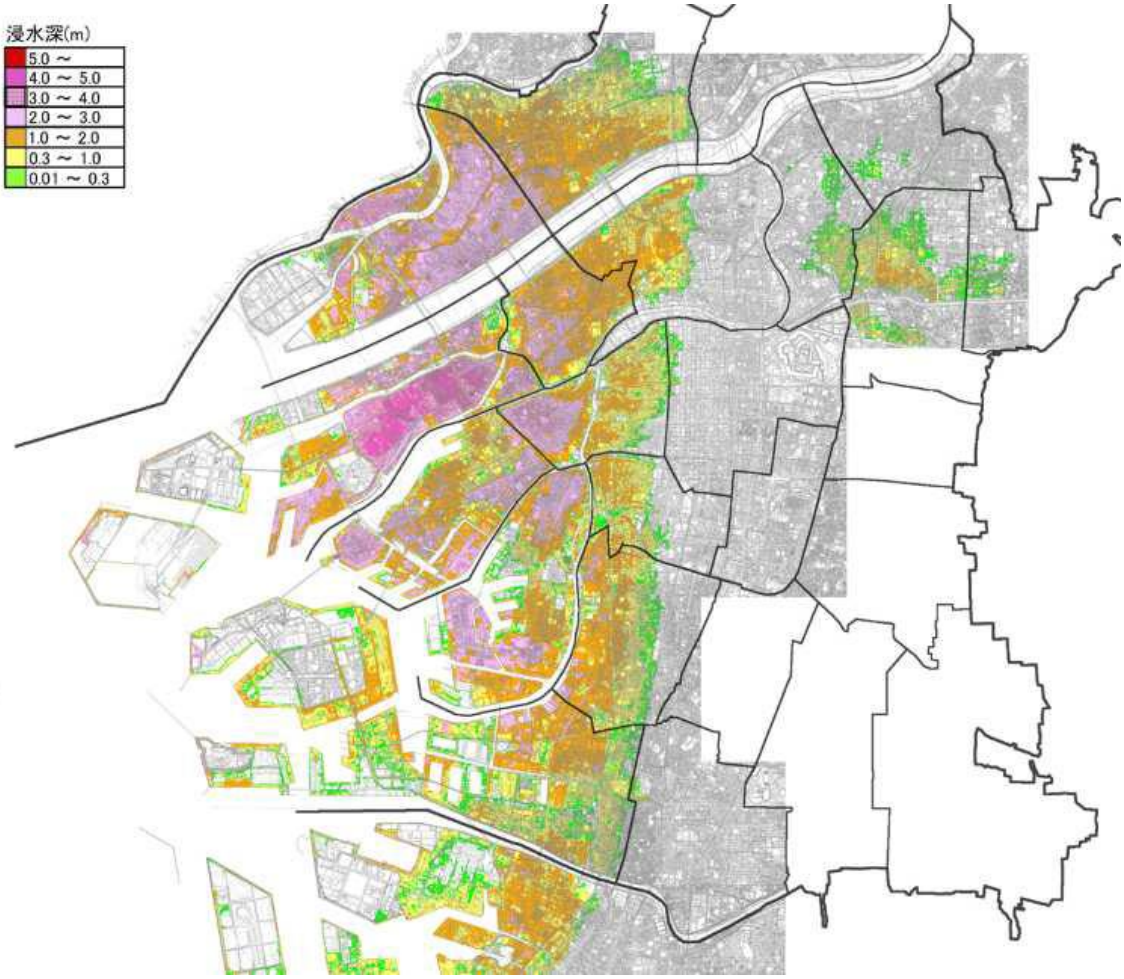
浪速区では、東南海・南海地震や南海トラフ巨大地震による津波が発生した場合や大雨が降った場合の浸水が想定されている。それは、津波、河川氾濫、内水氾濫の三種類の水害である。

1. 津波

海溝（プレート境界）型の地震が発生すると、津波が発生する可能性がある。下の図は、南海トラフ巨大地震が発生した場合（マグニチュード 9.1 程度）に大阪市域で予想される津波浸水想定区域である。

※満潮時に防潮堤の沈下や防潮施設（水門・鉄扉等）が閉鎖できない場合などを想定

※想定では、地震発生後、最短で約 110 分で大阪市に津波の第 1 波が到達します。



津波の特徴

速くて力が大きい

沿岸部でも津波は短距離選手なみのスピードでせまってきます。また、くるぶし程度の波でも力が大きく、立っていることができません。

津波は川をさかのぼる

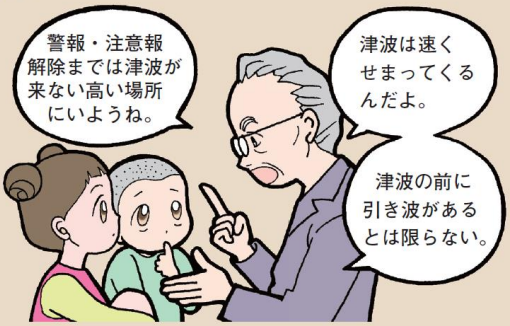
津波は川をさかのぼってきます。沿岸部に限らず、河川流域でも津波に対する警戒が求められます。

繰り返しやってくる

津波は繰り返しおそってきます。警報、注意報が解除されるまで避難している高い場所にとどまりましょう。

引き波があるとは限らない

津波が来る前には、引き波があると言われることがありますが、前触れなく津波が来ることもあります。



避難のポイント

津波から身を守るためには、少しでも早く、高いところに避難しましょう。

地震の揺れの程度で自己判断しない

揺れが小さくても津波が起こることがあります。小さい揺れであってもまずは避難しましょう。

避難に車は使わない

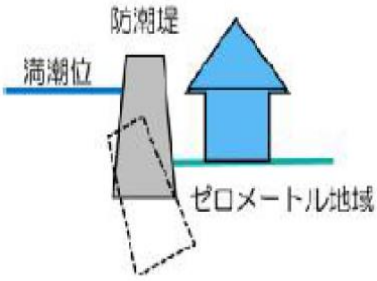
原則として車で避難することはやめましょう。渋滞により避難が遅れる場合があります。

「より早く」、「より高く」逃げましょう

浸水が始まってしまった場合は一刻を争います。「遠く」よりも「高い」場所に避難しましょう。近くのマンションやビルの３階以上に逃げ込むようにしましょう。

防潮堤の沈下等による浸水（南海トラフ巨大地震）

地震の揺れによる堤防沈下等により津波到達前に浸水が始まる場合を想定（地震の揺れによる防潮堤の沈下等により、朔望平均満潮位※からの津波到達前の浸水）

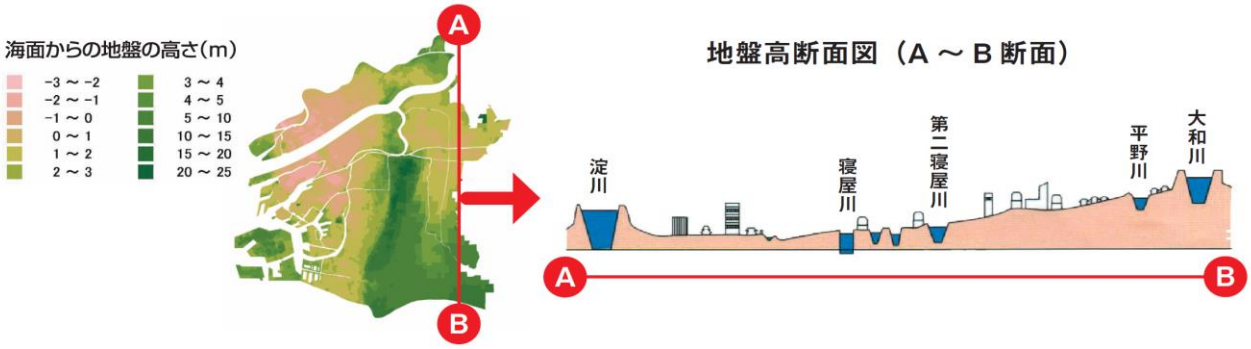


地震発生後 10 分以内に、河川からの溢水により浸水（30cm 以上）する区域

津波による浸水が 30cm 以上になるまでの間に河川からの溢水により浸水（30cm 以上）する区域　　（朔望平均満潮時）

2. 河川氾濫

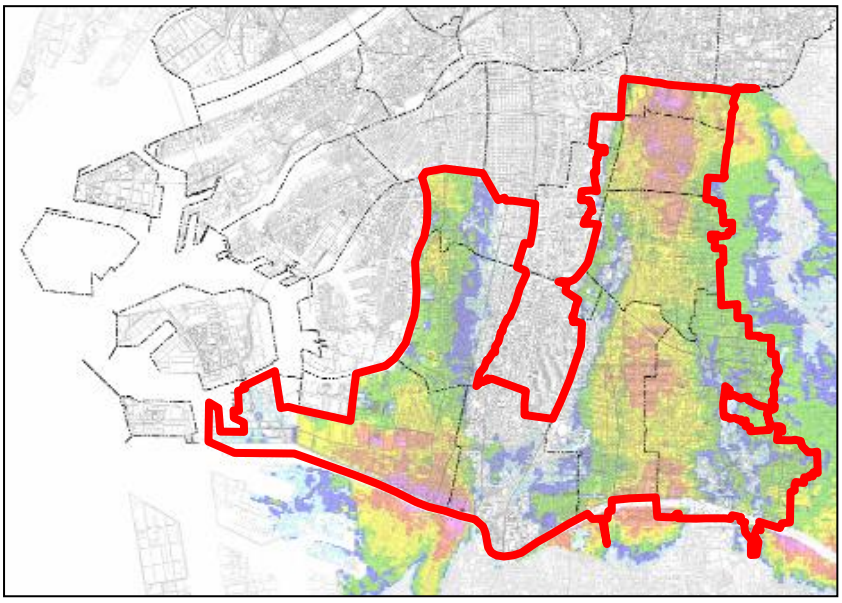
河川氾濫とは、河川水位が堤防よりも高くなったときや、堤防が壊れたときに、河川の水が流れ込む氾濫であり、河川管理者等によって、浸水の想定がされている。以下、河川氾濫を想定する浸水予報河川と浸水想定区域を示す。浪速区では、大和川が氾濫した場合等に大きな災害となる可能性がある。



大阪市には多くの河川があり、江戸時代には「浪華八百八橋」と呼ばれるなど水の都として発展してきました。弥生時代まで遡ると、現在の市域の半分まで海が広がり、内陸部でも湖が広がっていました。このような成り立ちから、市街地の多くが低地で水害に弱い地形と言えます。

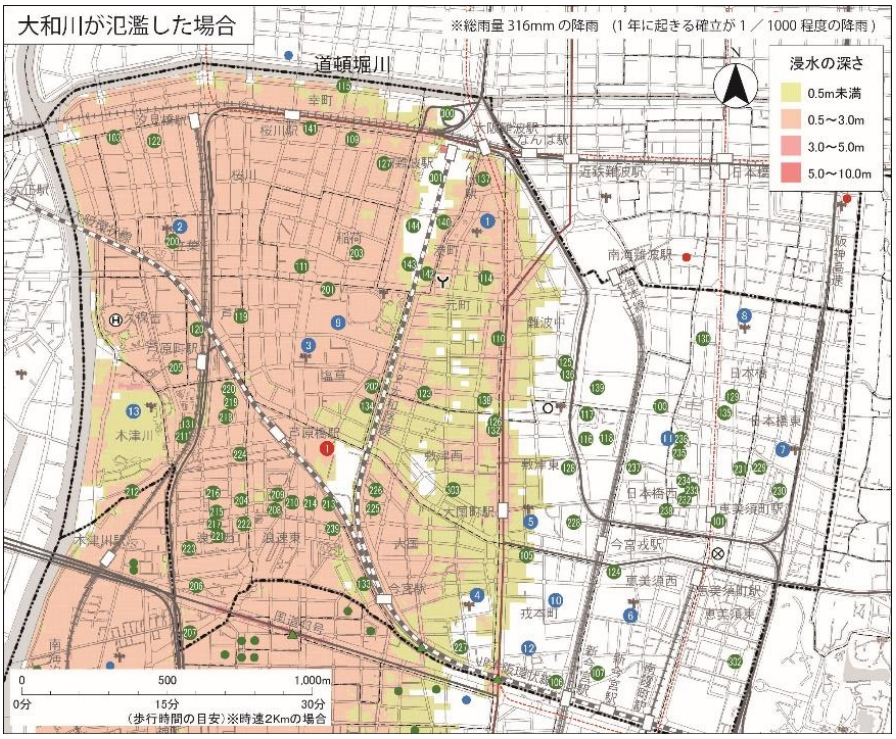
大和川が氾濫した場合

※総雨量 316mm の降雨（1 年に起きる確率が 1／1000 程度の降雨）

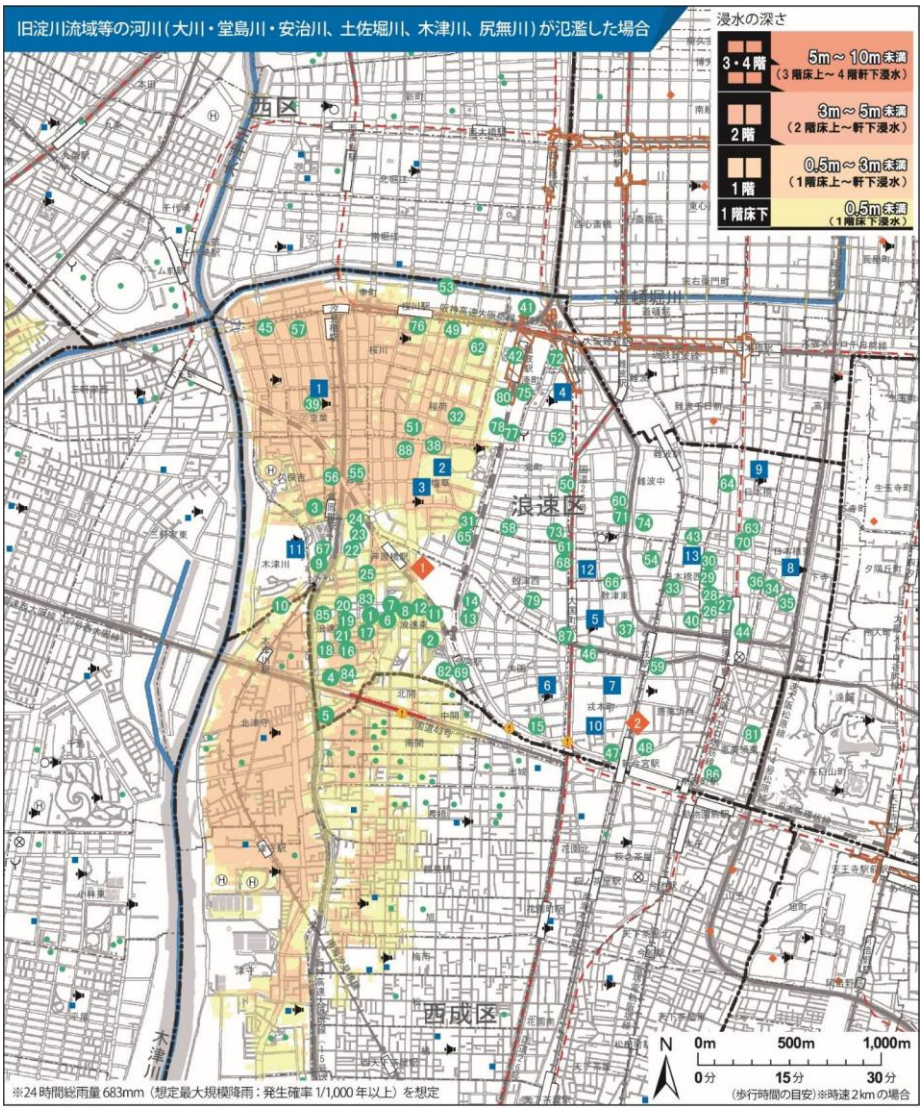


浸水の深さ

- 0.1m 未満
- 0.1 ～ 0.3m
- 0.3 ～ 0.5m
- 0.5 ～ 1.0m
- 1.0 ～ 2.0m
- 2.0 ～ 3.0m
- 3.0 ～ 4.0m
- 4.0 ～ 5.5m
- 5.5 ～ 7.5m
- 7.5 ～ 10.0m



旧淀川流域等の大川・堂島川・安治川、土佐堀川、木津川、尻無川が氾濫した場合

※想定条件(状況)は、 大阪市域に高潮警報が発表され、三大水門(木津川・安治川・尻無川)を閉鎖することにより、大阪湾へ川の水が流れなくなった状況の中で、河川に想定し得る最大規模降雨が発生したとき。

※想定する降雨は、京橋地点上流域の 24 時間総雨量 683 ㎜、1 時間最大雨量 138.1 ㎜の降雨(発生確率 概ね 1000 年以上に 1 度の確立規模)